

第5回 長久手町住民会議報告

～「長久手まちづくり」住民サミット～

日 時：平成 20 年 6 月 7 日（土） 午前 10 時～12 時

場 所：長久手町福祉の家 2 階会議室

住民会議メンバー：11 名

事 務 局：長久手町企画政策課 課長補佐、専門員、主事
コンサルタント 4 名

当日のプログラム

○あいさつ

○議 題

①将来ビジョンに向けた具体的提案その 2

- ・ グループ討議
- ・ グループ発表

②その他



■（1）あいさつ

冒頭に企画政策課長補佐があいさつを行いました。

■（2）提案書の構成案について

提案書の構成や取りまとめ方法などについて、事務局案を説明しました。

また、提案書に掲載予定であるメンバーからの一言、および写真の掲載について、承諾を頂きました。

■（3）グループ討議 及びグループ発表

各グループで設定した将来ビジョンの具体的提案について、意見を整理しました。

また、各グループで話し合われた内容、グループ討議の結果を発表しました。

A グループ



将来ビジョン：『万博の理念を継承するまち』

2つのテーマのうちの1つ「未来へつなげるエコ長久手
(ライフスタイルの見直し)」

発表

●CO₂

- ・太陽光パネルの設置を促進させる。自転車をもっと活用していく。前はサイクルトレインという話が出たが、自転車に乗せるための仕掛けが必要である。道路の整備が必要であり、自転車道があると良い。
- ・休耕田、遊休地に緑を増やしてCO₂の吸収量を上げる。東小学校の前には立派な桃畑があるが、そういった場所を役場が仲介して、栽培したい人にボランティアとしてやってもらったり、場所を貸してやってもらうというのではないかと。様々な施策を取り入れて実施していく必要がある。

●農ライフ

- ・長久手の田園バレー構想のコンセプトを更に進めて、自然との共生という方向で再構築すべきという話し合いをした。ドジョウやトンボ、カエルなどの生き物がいて触れられる田園バレーを目指すべきである。
- ・有機農法や無農薬栽培を進めることは、生き物を大事にすることにも結びつき、町として進めたらどうか。また、家庭菜園を推進したらどうか。

●リサイクル循環

- ・生ごみのリサイクルや今回一番議論になった木材の剪定くずをエネルギーに変えることなど、リサイクル型、循環型の社会を目指す必要がある。生ごみについては、堆肥化を考えていきたい。

●自然

水の浄化や川の浄化作用をつくることも重要である。川の浄化は難しい問題だと思うが、自然浄化が一番大事だと考える。

●地域ボランティア

- ・長久手町には、ボランティア活動をやりたい人や元気な高齢者、団塊の世代がたくさんいる。こういった方たちに地域ボランティアとして活躍をしてもらう。そのためには、色々な選択肢を提示して、自分のやりたいことを選んで頂く仕組みにすると良いのではないかと。一人一人が楽しんでやれる仕組みを考えていければと思う。

・環境モデル都市に長久手町が参加しておらず、万博からの検証はどうなったのかと思い意見を出させていた
 いただいた。今回発表にあったことを上手くまとめて、CO₂削減の長久手スタンダードを作ったらどうか。
 非常に大変な作業になると思うが、都市近郊で5万人の中小規模の都市で、世界に発信するとしても参考
 になるのではないか、と思う。

グループ討議の結果

「未来へつなげるエコ長久手」

CO₂削減

- ・太陽光パネル設置促進
- ・自転車をもっと利用する
- ・リニモに乗せるための仕掛けが必要（サイクルトレイン）
- ・自転車道があるといい
- ・ネットワーク化
- ・環境モデル都市

- ・休耕田に木を植える
 （果樹（ももなど）を植えて、
 有料で収穫してもらう）
 ↓
 仲介（例えば役場）
 ↓
 やりたい人にやってもらう

- ・長久手スタンダード
 ⇒(CO₂)削減
- ・休耕田を活用して、
 緑を増やしてCO₂
 吸収量アップ

農ライフ

- ・田園バレー再構築
 ↓
 自然との共生
- ・生き物に触れる
 生き物がいる農
- ・有機農法
 無農薬を進める
- ・自宅での家庭菜園を進める

リサイクル循環

- ・生ごみのリサイクル
 一般家庭、公共施設、伐採樹木、
 剪定くず → 堆肥化
- ・木材（剪定くず）をエネルギーに

自然

- ・水の浄化、川の自然浄化作用を取り戻す

地域ボランティア

- ・団塊の世代にもっと地域の活動を
- ・いろんな選択肢を見せて、自分のやりたいことをやってもらいたい
- ・一人一人がやる気
 楽しんでやれる

B グループ



将来ビジョン：『75歳～住みたいと思う花園のまちづくり』 (高齢者から子供まで元気な暮らし)

発表

●拠点

- ・お年寄りの方が家にこもらず、生き生き暮らせるようにするにはどうしたらいいか、ということ話し合った。一つは古戦場を拠点にした施設をつくるという案が出た。古戦場駅のエリアに便利な拠点をつくって、老人が暮らせる施設や役場や医療モールクリニック(色々な科の診療所が1つの建物に入っていてそこで医療を手軽に受けられる)があると良いのではないか。ここに行けば何でもあるという安心できる拠点をつくる。また、そこが交通の拠点になると町内の様々な場所へ行ける。
- ・町外の方たちも集まれるような映画館や商業施設、桜で有名な古戦場公園のような四季を感じられる綺麗な町並みができるといいのではないか。

●地域

- ・各地域にある老人憩いの家や児童館、公民館があまり利用されておらず、地域の方がもっと気軽に交流できる拠点について話し合った。例えば、お年寄りが将棋を指したり、おしゃべりしたり、テレビをみたり、手芸をしたり、誰かが先生として得意なことを教えたり、子育て中の方が子供を連れて来たり、昼間に孫の面倒を見ているおじいさんやおばあさんが孫を連れて来たり、どの世代の方もコミュニケーションをしながら楽しむ、自由に気軽に集まれる場所を各地域につくったらどうか。全部一気にやることは大変であるため、モデル地域としてどこか一箇所を選んでスタートさせてみてはどうか。
- ・ラジオ体操なども、決まった時間にそこへ行けば必ず体操をしているという場であれば、気軽に集まってコミュニケーションがとれるようになるのではないか。
- ・核家族でコミュニケーション不足の子供たちが増えているが、多くの人と交流できる場があると、子供も健やかに成長し、多くの方にかわいがって育てられた子供たちは長久手のことが好きになるし、大人になった時、長久手に戻ってくるのではないか。

●今ある自然・モノの活用

- ・長久手町には自然や水、川、池が多くあり、そういった所で親しめるような拠点をつくる。
- ・各分野の横のネットワークを充実させる。
- ・人材バンクは、人材バンクリストが既にあるが、周知されていないため、多くの人がわかるようにする。
- ・学校の空き教室を利用した成人学級などを行うと良いのではないか。

●里山

- ・COP10 が名古屋市に決定し、愛知県も一緒にモリコロパークを使って行うそうだが、長久手町としても里山を作ってCOP10に手を挙げてみてはどうか。「里山なら長久手町へ見に来て下さい」と言えるようにすれば、県からも補助が下りたり、里山も残っていくのではないか。

グループ討議の結果

「75歳～住みたいと思う花園のまちづくり」

地域

- ・多世代交流 — モデル実験
- ・どの公園でもラジオ体操
- ・老人憩いの家、児童館などの有効利用を検討
- ・地域ごとに、歩ける距離でいろんな世代が施設を利用できる
- ・コミュニケーションが取れない子供たち
- ・いろんな世代の人たちに見守られる環境づくり

里山

- ・里山の保全
- ・COP10 誘致を活用

地域

- ・みんなが気軽に利用できる交流施設
- ・水と親しむ拠点（川、池）
- ・人材バンク制度の周知拡大
- ・各分野の横のネットワーク
- ・学校の活用
(空き教室を活用した成人学級など)

拠点

- ・四季を感じる拠点
- ・ここに行けば安心（何でもある）という拠点
- ・役所の移設
- ・交通の拠点
- ・公共交通中心の移動可能な町づくり
- ・具体的な形（ハード）、古戦場駅に集積
- ・交流施設
- ・医療モールクリニック

C グループ



将来ビジョン：『長久手キャンパス =芸術文化をはぐくむ町=』
(質の高い文化・芸術)

発表

●将来ビジョン「長久手キャンパス=芸術文化を育む町=」

・前回のキャッチコピーに「一人一芸」という言葉があったが、全員に芸があるわけではなく、なんとなく浮いている感じがしたため、今回、「長久手キャンパス=芸術文化を育む町=」に変更した。芸術や文化が高い町といったイメージを作っていくたい、ということで話し合った。

●県芸大と長久手町のコラボレーション

・最大のキーポイントは、県芸大との連携ではないか。長久手町の立派な資産として県芸大がある。それをうまく活用することで町全体を芸術文化の核にしたい。

・県芸大の活動に町民も触れることで、長久手町も芸術文化の町というイメージがつく。また、県芸大も新しいユニークな取り組みを行うことにより全国の芸術大学の中でのレベルアップに繋がるのではないかと。お互いに相乗効果があるのではないかと。

・県芸大と長久手町がしっかりコラボするためには、県芸大がどういった活動をしているのか町民への情報発信が必要である。「長久手キャンパス」は、開かれた県芸大、町民みんなを巻き込んだ活動ができるようにという意味で付けた。

・芸大祭があるが、長久手町に広報の窓口がなく、愛知県からの発信のみのため、なかなか町民に周知されない。町民が知らないまま終わってしまうのではなく、長久手町から県芸大の活動情報を発信したり、発表の場を提供することで、町民がより多くの芸術に触れることに繋がっていくのではないかと。

●子供を育てる

・芸術文化の高い町にするためには町民全体の理解が必要であり、そのためには子どもの教育から取り組んだ方が良いのではないかと。

・子供たちに少しでもアートや音楽を知ってもらえるように、県芸大とコラボレーションする。

・県芸大の中でアートカフェをつくる。

・小中学校や高校の子供たちや生徒を呼んで、お芝居をみせたり、音楽を聞かせるなどの取り組みをする。

長久手町には全国でも有名な平成子ども塾という取り組みがあり、子供たちに自然体験や手作り体験をさせる特別なカリキュラムを学校で作っている。その芸術版を県芸大の協力を得て行えば、幼い時から子供たちの芸術の理解力を高めることにも繋がり、町全体が芸術文化を育む町になっていくのではないかな。

●名人を発掘する

- ・芸術と文化は非常に堅いイメージがあるが、1つの考えとして、名人というのでもいいのではないかな。最近では、埋もれた人材を発掘しようと、ある部分に長けた人がテレビなどで話題になっている。電車オタクやペン回しが得意な人などを巻き込んだ、柔らかい芸術文化を作っていこうという議論もあった。

●楽しめる場の提供

- ・サークル活動など集団で楽しめる場を提供することも大切ではないかな。Bグループでも出ていた様々な施設を利用して、多くの方が気軽に芸術文化に触れあえる活動があると良い。

グループ討議の結果

(仮)「長久手キャンパス =芸術文化をはぐくむ町=」

- ・以前に提示した将来ビジョン「一人一芸」は浮いている
芸術に触れる機会を提供する→磨いて発表(芸・趣味)

